

航空

戦争で歩んで来た

青春時代の我が人生

群馬県 小野 三作

昭和十三（一九三八）年三月三十日

群馬県の糸之瀬村尋常小学校高等科二年卒業、七人兄弟の末っ子、小さい時はよく兄弟から、お前は猫の尻尾だと言われていた。次男のため東京に出て、叔父の所で電気関係の仕事に就く予定でしたが、兄が許さず家で農業の手伝いをしていた。

昭和十三年九月下旬

この頃、日本は戦時態勢でしたので、国民の未成年

の次男は強制的に軍需工場へ徴用され、軍隊に入るまで働かされるのであります。私は新潟県柏崎市の理研工場へ連れて行かれ、日曜日以外は朝七時から夜六時まで働かされました。その時、沼田及び利根郡から徴用された仲間が十人ぐらいたった。私はいつか機会が来たらこの工場を逃げ出そうと考えていた。

昭和十三年十二月二十八日

遂に待ちに待った夜が来た、同僚にお願いして寮の二階の窓から逃げ出すのを手伝ってもらい、夜十一時頃、吹雪の中を柏崎の駅に向かってひたすら歩いた。年の瀬も迫り、後数日でお正月を迎えようとしており、外が明るくなるにつれて騒々しくなってきた。私はそのまま柏崎駅より東京へ向かう。

小学校五、六年の頃から考えていた憧れの東京、上

野駅に着いて驚いた。年の瀬で故郷へ帰る人、東京に戻る人、改札口付近は歩けない程の混雑だった。何れにしても、私は徴用の体で軍需工場を逃げ出したので、故郷には戻れず、直接浅草にいる叔父の家を訪ねた。

昭和十五年四月七日

東京で住み込みで働きながら、神田の現東京電機大
学電気科で電気工学を学ぶことを決意した。

昭和十五年十月十日

東京地方通信局長より、甲種電気工事人免許証が交
付される（東第五五八六号）。昭和十五年四月より、
強電（一〇〇ボルト以上の電圧が流れる配線の事）の
電気工事は、免許証を持たない電工を使って仕事はで
きないよう法令が変わり、電気工事の技術者は大騒ぎ
をした。

その甲種電気工事の免許証を、私は僅か十六歳で取
得したのである。その免許証を取得してから、六十年
以上過ぎた今もその免許証を大事に金庫に保管してい
る。

昭和十六年三月三十日

東京電機大学電気科を遂に働きたがら卒業ができ
た。卒業後、約一年叔父の工事で、お礼奉公と言
う事で、住み込みで働く事に決めました。

昭和十七年四月上旬

年期奉公も終え、仲間と組んで今の浅草橋付近に小
さなお店を借り、明光電気商会という電気工事請負の
工事を会社を設立した。その頃は東大戦争の真っ只中
で働き盛りの若い男の人には次から次へと召集令状が
来て、人手不足の時代であったが、幸いにして仕事だ
けは絶える事も無く、苦しいながらも、儲かるので嬉
しかった。

ある時は、群馬県の中島飛行機工場の格納庫に使用
するクレーン取り付け工事の指名競争入札の時、人手
が無いため入札前に仕事を辞退した業者も何社あり
ました。結局、その電気工事は明光電気商会が請け
負った。その他中野の憲兵学校の仕事もその当時して
おりました。

昭和十八年四月上旬

二十歳で徴兵検査を迎え、甲種合格と決まり、やがて来る出征の日を待ちながら仕事に励んでおりました。

昭和十九年春

日本の国民として、逃れる事のできない出征兵士として軍隊へ入隊する朝が来た。朝と言ってもまだ薄暗く先祖の位牌の前に座り、両親をはじめ兄弟と一緒に、盃を酌み交わして最後の別れの挨拶をした。

午前六時頃、家族、親戚、村長をはじめとし、大勢の村民の歓呼の声で送られて、沼田駅に到着して汽車を待った。汽車は静かにホームを離れた。村民の皆様は立派に戦って下さいと、目頭を赤くして私に頭を下げた。

その日の内に、新潟県高田市にある第七錬成飛行隊第一中隊第一班に配属され、翌日からしごかれた。一般の人は青年団で各個教練をしてきていたのですが、私は電気専門学校ですので、演習に行ってもいつも一人だけ叩かれ顔が腫れ上がっていた。また夜になると航空隊だから急降下をやれと、時々内務班の壁に向

かって逆立ちをさせられた。しかし演習は僅かだった。一緒に入隊した半数の人が飛行部隊爆撃搭乗無線要員として「飛三号無線機」の通信教育と無線機の修理、組み立ての猛訓練が始まった。私は即、専門学校を出ているので、講師の立場に移された。

昭和十九年九月上旬

まだ半年も経たないのに、第一選抜兵として千葉県にある帝都防衛戦闘部隊の無線通信兵として転属命令が下り千葉県隊に移される。

昭和十九年九月中旬

我々無線通信兵数十人は、高田駅から高崎経由で千葉の帝都防衛戦闘飛行部隊に向かった。途中高崎駅で、最後の便りと思い書いた手紙を、乗車した見知らぬ人にポストに入れてもらうよう頼んだ事を忘れもしない。この手紙が親、兄弟に送る最後の便りとなった。

その頃ジャワ、及びスマトラ方面の日本軍駐屯部隊は、敵の連合軍部隊に反撃され、インドネシア方面の烏々の小部隊は崩れ始めた。

昭和十九年九月下旬

千葉の部隊に転属してから一カ月も経たない内に、南方軍の航空飛行戦闘機部隊に所属する「飛三号無線通信」要員として転属命令が下り、外地へ移動を始めた。移動部隊は將校以下兵隊数百人。門司の兵站に集合し、他の部隊と合流しておおよそ二週間程度、輸送船を待った。

この門司兵站で輸送船を待っている我々部隊に外出の許可が下りた。早速、仲間三人で門司の海岸で海水浴でもして一日を過ごそうと思い、海に入り沖に向かって泳ぎ出した。暫くして岸から三〇〇メートルぐらい離れたので、帰ろうと岸に向かって泳ぎ出した所、岸に戻るところか、沖の方へと逆に流され始めた。その時助けを求めため、腰の三メートルぐらいの真つ赤なフンドシを振り上げ、沖に停泊している船に助けを叫び続けた。何時か時間が過ぎ去って、私達はある漁船に助けられた。ただその時は意識が朦朧としてどのように助けられたか、あまり記憶がなかった。後で人に聞かされた話では、泳ぎ出した時刻が

ちょうど引き潮時なので九死に一生を得た思いで兵站へ戻った。

昭和十九年十月上旬

乗船命令が下り、日本を後に出港した。我々を乗せた輸送船は、いまだかつて一度も乗った事もない一万吨級の大型輸送船である。大型貨物船で乗る場所が一番下の第三船倉である。中々暑苦しくて眠れないので、戦友同士で外に出て語り明かそうと、船倉から甲板へ出て祖国の思い出を語り合った。時刻は夜の十時近く星が降るような素晴らしい一時でした。その時、今でも時々家族や友人に語っておりますが、映画俳優の上原謙さんが腰に軍刀を下げ、我々戦友同士の中に入って来てタバコを一本ずつ吸うようにと差し出してくれた。

昭和十九年十月中旬

我々の乗った輸送船は、台湾の基隆港に上陸、この基隆の兵站で内地から後統船で送られて来る援軍と合流して、何隻かの船団を組み日本海軍の駆逐艦が護衛して、昭南島に向かう予定である。

当時本土から台湾經由で、パシー海峡を通って南方方面行ききの日本の輸送船団は、アメリカの潜水艦に狙われ、多くの犠牲者を出し、尊い若い人の命が大海の藻屑となって消えていった。そのため南方の援軍、兵器、及び物資はほとんど着かなかつたらしい。

昭和十九年十一月頃

いよいよ、昭南島行ききの乗船が決まった。基隆港に集合した兵員数、おおよそ五千人前後だった。輸送船の甲板には裸馬が三〇頭近く繋かれ、その他二トン級のトラックが二〇台程積んであるのが目に写った。

輸送船は夜明けを待ち、静かに岸壁を離れ出港した。門司港を離れる時は汽笛も鳴らし、船のスクリューの音も体を揺さぶる程だったが、基隆港を出港をする時は本当に不気味に静かな夜明けで、汽笛も鳴らさず、ふっと気が付いた時は、輸送船は遙か沖を航行していた。この一隻の輸送船を駆逐艦が前後左右を護衛し、アメリカの潜水艦の攻撃を避けながら、東シナ海經由で、仏印の沖合を通過して、昭南島に上陸することができた。

十一月末なので、日本では所によっては雪も降る季節だと言うのに南国のこの島では真夏の熱さ、初めて見る南の島、背中が焦げるような物凄い熱さ、海岸にはヤシの木が立ち並び、それは想像を絶する思いであつた。

昭和十九年十二月上旬

昭南島に上陸して兵站で待機していた部隊は、それぞれ南方軍の前線部隊に配属された。我々無線通信要員は歩兵部隊を含め、おおよそ五百人程度の小部隊に編成され、昭南島よりトラックに分乗してジョホールバルを渡り、マレーシアの首都とクアランブールの兵站に行き、次の移動場所、出発の日時の指令を待つことにした。

僅か一週間足らずで、極秘の移動命令が下り、クアランブールの駅に集合、マライ鉄道でビルマへ行くことになった。ラングーンより遙か奥地にある南方軍最大の九十七重爆撃機部隊である。私達はこの爆撃部隊の搭乗無線要員として、第一線に送られることになった。

いよいよ汽車で出発。汽車と言っても全車両が無蓋車の貨物列車で、その上、石炭が無く薪を炊いて走らせていたので、動き出すと火の粉が飛んで来て、体中が火傷だらけで大騒ぎをした。連結車両は一五両程度の編成だった。

クアランプールを出発してビルマのラングーンへ到着するまでには、何回もジャングルの中で列車を止めて隠した。連合軍の空襲で、マライ鉄道やビルマ鉄道の鉄橋を爆破されていたので、工兵部隊が来て鉄橋を修理するまでジャングルやゴム林の中に隠れ、その間人間が食べられるような木の実や柔らかい草の芽などを採し、分けあって食べながら幾日も過ごした。もちろん、トカゲ・ヘビは部隊全員の好物で喜んで食べていた。

昭和二十年一月中旬

やがて目的地のラングーンに到着、その後は徒歩で歩き続け、九十七航空重爆撃隊にやっとの思いで辿り着いた。戦友の話では、もう正月は大分前に過ぎていたらしい。この部隊は、中国大陸方面から南下して来

た幾つかの部隊と合流して、あの有名なインパール作戦を展開した最前線のミンガラドン飛行場でした。このインパール作戦は長い雨季のため、最前線の日本軍部隊には補給が続かず、総崩れをしたのである。

日本ではもう春だというのに、遠く離れたビルマでは雨季の真っ最中、戦争はますます不利な立場に追い詰められ、戦闘機操縦士は中国大陸から南下してきて大勢いるのだが、肝心の戦闘機が何機も無かった。

昭和二十年三月

明けても、暮れても、毎日降り続く雨、その上連合軍が空襲に來ても我が航空爆撃部隊には、戦闘機がほとんどなく、あるのは九七重爆撃機が五、六機だった。

我が航空部隊が出撃をしないことを暗号で知ったイギリス軍は、夜が明けると毎日のように、空が暗くなる程の大編隊を組んで、爆弾を投下して引き上げる。その度に「我が方の損害は軽微なり」と報道をされたが、一回の空襲で数十人の死傷者が出ていた。

その死体を一カ所に運び、夜になるのを待って火葬

にし、部隊全員で手厚く埋葬したことが幾度かあった。

この頃、嬉しいニュースが時々流れた。内地から水冷式の戦闘機が近い内に必ず来るから、というが遂に一機も着かなかつた。それは日本の飛行場を何機も飛び立ってはいるが、東シナ海の上空やバシー海峡の上空でアメリカの戦闘機に狙われほとんどが撃墜されていた。

また、この頃は戦闘機がほとんど無いので、部隊によつては志願兵が数十人のグルーブを組んで、日本刀を背負い、深夜を待つて、イギリス軍やインド軍の野営のキャンプ場の中へ斬り込み隊として殴り込みを掛けた将兵もいたらしい。もちろん部隊に帰つて来た人は少なかつた。

昭和二十年四月下旬頃

連合軍が、我々の部隊の後方、ビルマの首都ラングーンに大部隊を投入して上陸作戦を開始した。そのため我々南方軍部隊には武器弾薬はもちろん、食料も届かなくなつた。後は敵の連合軍、前方はイギリス軍

とインド軍、毎日夜が明けるのを待つて、生き抜くためにジャングルの中へ逃げ込み、戦友同士で身を隠すのが仕事だつた。しかし撤退するにしても、前方はインドの国境、まして雨季のため低地は湖のようになっている。そこで各部隊は山越えをして、タイ、及びインドシナ方面へ撤退するよう南方軍総司令部から命令が伝えられた。この山越えとは、ビルマ・タイ・ラオスの国境、デルタ地帯である。完全な歩兵部隊が辛うじて通れるぐらいの山岳地帯である。しかしこのデルタ地帯を山越えしなければ、生きて再び日本には帰れない、と各部隊はあわてふためいた。

昭和二十年五月下旬

南方軍撤退の命令が下つたが、同じ南方軍でも我々の部隊は九十七重爆撃隊、飛行部隊であるこのビルマのミンガラドン飛行場の部隊の中にはいろいろの担当の部隊が存在している。例えば各種飛行機の整備士、飛行場整備班、飛行部隊を護衛する歩兵部隊、野戦病院などである。この野戦病院には病人はもちろん、銃撃、あるいは爆撃の破片を受けた負傷者がおり一口に

移動と言ってもそれは想像以上に大変なことであった。

しかし、私達は幸いにして航空部隊なので、九十七重爆撃機を利用して、ビルマからタイの上空を通過して南インドシナ、仏印の首都サイゴンの飛行場へ撤退し得たのである。

もちろんビルマの第一線部隊や野戦病院に入院している将兵をはじめ飛行機の整備士その外、各部隊を残して飛び立ったのである。それは飛行機に乗れる人数が決まっているから止むを得なかった。

サイゴンの飛行場へ着いて間もなく市内へ外出して見たら、その頃は一部フランス軍の部隊が駐屯していた。

四、五人の戦友とフランス軍の営門の前を通過してふと覗くと、それは驚いた。数人のフランス軍兵が全員見たことのないような服装をして立っていた。国によって服装が随分変わるものだと驚くだけであった。

仏印のサイゴン飛行場に撤退してから、既に三、四週間は経過したと思う。南方軍総司令官より移動命令

が下り、即、仏印方面に駐屯している各日本軍部隊は、全員昭南島へ集結するよう指令された。我々ビルマから南下した部隊は仏印に駐在している他の部隊と合流して、今度は貨車で、タイ国の首都バンコックを通り、マライ鉄道を利用してジョホールバルを渡り、昭南島のブキテマ兵站到集結した。このブキテマ兵站には、私達を含めて兵員五千人前後はいたと思う。

ここでの兵站の軍隊生活は、本当に愉しい日々が続いた。朝起きて食事が済むと、用事がないので時々戦友同士で島の繁華街で飲んだり、食べたり歩き回っていた。

しかしそれも僅かの時間で、毎日のように連合軍の爆撃機が時間を決めて現われる。その間に飲食したのには無料である。現地人がほとんど命が欲しいので、地下の防空壕へ潜って出て来なかったからである。しかし、こんな軍隊生活も長くは続かなかった、連合軍の空襲は、日増しに激しさを増して来た。

昭和二十年八月十五日

この日は、五十有余年経った今でも、忘れようとし

ても、忘れることのできない。それは本土の日本軍が無条件降伏をしたことである。勝つまでは生きて帰るなど言い含められて、この遠い他国の地で命的に生きて日夜戦っているのに、まして本土の日本軍が最後の決戦もせずに負けるとは。

我々外地で戦っている日本軍は、誰一人報道されたニュースを信用する兵士はいなかった。それから間もなくして、上層部より、内地は全土に渡り進駐軍が支配していると発表された。

その時、南方軍総司令官より通達があり、我々南方軍は最後の一兵まで戦い続けるようにと将兵全員に命令が下った。それから暫くして、敵の飛行機が低空飛行しながら宣伝用のチラシを撒き散らした。その内容は「戦地で戦っている日本軍の皆さん、本土は完全降伏したので、一日も早く犠牲者の少ないうちに、武器を捨てて防空壕から出て来るように」と盛んに呼び掛けている。また、幾日が過ぎた。チラシには東京の市電の運転士や車掌には女性の皆さんが働いていると書かれ、写真も載っているのを見た。その外、日本の国

内は、男性の働き盛りの人が少ないので、一日でも早く降伏して日本に帰り、本土の復興と再建のためにとチラシには書かれてあった。

昭和二十年十月上旬

イギリス軍の中でも特に強いと言われているスコットランド軍が連合軍と合同作戦で昭南島の沖合より、連日のように艦砲射撃を展開して来た。空と海からの攻撃で島民は既に島を逃げ出し、日本軍だけが残って戦いながら住んでいた。我が軍隊には、既に弾薬、食料も残り少なく、また戦う気力もなく連日連夜の激戦で疲れきっていた。

遂に昭南島で戦っていた日本軍は、一時ジョホールバルを渡りマライのクアランブルを超えて、タイの国境付近に再び集結するよう指示があった。早速小部隊に編成され、昭南島を後にジョホールバルを渡り、マライに徒歩で向かった。背中には三日間一人で食べるぐらいの缶詰と僅かな私物だけを背負い、行軍を続けた。昼間は敵の空爆を逃れるためジャングルに身を隠し、日が沈んでくるのを待って行軍を始める。昼間

は空襲で騒がされ、夜は夜でいろいろの毒虫や蚊に悩まされた。

生きて恥をさらすよりは、死して祖国のためにと、戦友同士励まし合つて、夜になるとヤシやゴム林の中を朝まで歩き通した。

昭和二十年十月下旬頃

我々の部隊が、マライの首都クアランプールにやつと辿り着いた時は、イギリス軍が上陸していて、我々日本軍が撤退してマライ半島へ逃げて来るのを一足先にクアランプールで待ち構えていた。強力なイギリス軍に包囲された日本軍は、次々と武器を捨て、敵の指示に従つて無条件降伏をするだけであつた。

捕虜となつた日本軍は、各部隊名ごとに連れて行かれ、幾つかの幕舎の中に押し込められ、一人一人尋問されるのを待った。イギリス軍の尋問は予想以上に厳しく、MPはもちろん、各部落の現住民の首実驗に立ち会わせた。それは上陸してマライを通過当時、何もしない現地人に危害を加えたか、否か、顔や態度で見分けるためである。

我々の部隊は南方軍。九十七重爆撃機航空隊なので、部隊長以下約五百人前後、全員が検問所を通過するのいろいろな考え、最終的には隊長以下全員、階級のバッチを取外し、髪の毛と眉毛をお互いに持ち合わせたカミソリで剃り落し、少しでも優しい顔に見えるようにし、不用品私物や危険物は全部処分して検問所の取調べを待った。

検問所を通過した日本軍捕虜はそれぞれ捕虜收容所が違ふ。特に前線で略奪とか違法を侵した将兵はその場で即ブラックキャンプ、少し怪しげな将兵は後日取調べをするので灰色のキャンプ、それ以外の捕虜はホワイトキャンプと三種類のキャンプ（幕舎）に連れて行かれるのである。将兵以下捕虜全員は部隊名の別は無く、陸海空の種別はもちろん、胸のバッチも取り外され、上下の階級はその日から無くなった。今日から士官以上、将校でも階級が無いので恐くは無いが、恐いのは野戦で長い期間に渡つて戦つてきた万年以上等兵であつた。それには我々捕虜を監視するイギリス軍の兵隊と真つ黒な顔をしたインド軍の兵隊である。

監視兵は、いつでも即小銃で捕虜の行動によっては撃てるよう我々に銃口を向け周囲を囲んで見張っていた。

捕虜は一組が二十五人の人数に分けられ、イギリス軍のトラックに乗せられ、一台のトラックに三人の小銃を持ったイギリス兵が乗って監視をしている。先日渡ったジョホールバルを、今度はイギリス軍の捕虜となつて、小銃を突き付けられながら、昭南島へ逆戻り。ここまで落ちれば、人間は何が起こっても驚かない。後は運否天賦である。今考えれば誠に面白い光景である。

昭和二十年十一月下旬

やがて昭南島に到着した我々日本軍捕虜は、トラックに乗り合わせた戦友同士二十五人が一つのキャンプの中へ入れられて、いよいよ今夜から捕虜収容所生活が始まったのである。

また、いつの日か内地へ帰れることを心で祈りながら軍隊生活とは全然違った生きていきたいというだけの貧しい生活に変わっていった。この捕虜収容所は数カ

月前まで日本軍が、イギリス軍、インド軍、フランス軍の捕虜を五千人ぐらい入れて置いた嚴重な大きい捕虜収容所である。幕舎が三百ぐらい建っているキャンプ場である。

この収容所は最終的にはビルマ、仏印、タイ、及びマライ方面にいた日本軍將兵が一万人近く収容された。

翌日から、我々捕虜は四十五種類の作業に分かれて、朝食が済むとイギリス軍のトラックが迎えに来て、作業に連れて行かれる。休日は無く毎朝六時起床、朝食は七時、顔を洗う水も無く飲料水が有るだけ。朝食は個人個人が並んで飯盒を持って配ってくれるのを待つ。朝食と言っても、飯盒の蓋にカタクリの溶いたのが一杯、その外に昼食としてイギリス軍が野戦で食べていたレーションの缶詰が一個渡される。缶詰の中はタバスコが四本、その外チーズ、ビスケットでそれが昼食である。

また一日の重労働の作業が終わってキャンプに帰ると、その日の当番兵が幕舎の外のドラム缶に水を汲ん

で置いてくれたので交代で行水をしてから飯盒を持って朝と同じカタクリ粉の解いた夕食をもらって来る。

昭和二十一年一月元旦

我々日本軍捕虜は、内地ではお正月なので、今日は作業は取り止めと言われて、それぞれのキャンプごとにドラム缶の溜め水で体を拭いて身を清め、お互いに向き合って、酒の代わりに水を酌み交わして、いつの日か日本の土を踏む日を偲んで、敗戦の悲しみと悔しさを心に抱き、異国の空の下で終戦後の新しい年を迎えた。

お正月だと言うのに、昼間は四〇度近い暑さである。

昭和二十一年四月頃

毎日続く赤道直下での重労働作業で、病人や作業での怪我人が後を絶たない。一万人近い日本人捕虜は、いつの日か内地に帰れるか当てる無希望を描いて、毎日、朝から夜まで、イギリス軍の兵隊に使われている。

昭和二十一年四月下旬

我々捕虜の仕事は、全部で四十五種類あり、約十日間前後で交代して作業した。それは作業の中身が大変だからである。ある時は日本軍が敵前上陸した当時のイギリス軍やインド軍兵士の戦死者を埋葬した。人骨を掘削する作業もあった。

この頃、キャンプ場内で早く内地へ帰れるという嬉しいニュースが流れていた。それは、体が衰弱して再び作業ができないとイギリス軍医と日本の軍医が立ち会いで認めた病人か、あるいは手か足の指先を一節以上切断した人は、優先的に乗船命令が下りると言う話を語り合っていた。私はその話を聞き早速一日でも早く内地へ帰れるよう夜になると疲れ切っているのに、寝るのも惜しんで考えていた。

数日か過ぎ、ある夜ふと思いついたのであった。私は軍隊に入る前から、少し変な話であるが痔が悪いので入院して治療をしていたことがあるのに気付き、足か指の先を切断するより楽だと思い、早速翌日の就寝時間から毎晩全身に力を入れ息張り続けた。それから一カ月は過ぎたと思う、遂に病気は悪化して、汚い話

ではあるがトイレに行くとお血するようになった。そのため作業も時々休んでキャンプの中で一人で寝転んでいた。そこへたまたまイギリス軍巡視兵が回って来て、私は日本の軍医に連絡して、昭南島の日本軍専用の野戦病院へ入院させてくれた。

入院した私は、診察の結果、早速手術をすることに決まった。手術と言っても野戦病院なので麻酔薬も無く、病院のベットの上に両手両足を日本人捕虜の医務兵が三、四人掛かりで押さえ付けて切開するのである。

そのような痛くて苦しい思いをしても、日本の土を今一度踏みたかった。明けても暮れても、毎日ベットの上で日本へ帰ること以外は考えていなかった。

毎週、月曜日が来ると、イギリスの軍医が通訳を連れて手術の結果を診察に来た。一日でも早くまた収容所へ戻りたいからであった。

しかし、こちらの方は一日でも長く入院しながら、体の衰弱するのを待ち、内還命令（引揚船）の下がるのを待ち続けていた。毎週、週末になると決まって絶

食を始め、週明けの月曜か火曜日になると決まってイギリスの軍医が日本の軍医を連れて診察に来た。その結果、作業隊へ再度戻されるか、再起不能として、内地へ帰れる内還命令が下るか、その人の運命の別れ道が決まるのである。

昭和二十一年八月

ある日突然、病院内の朝食が済んで間もなく、イギリスの軍医が日本人の通訳を連れて、昨日の診断の結果を説明してくれた。手術後の治療の結果も余り良くないし、その上、体が非常に衰弱していて再起不能と判断されたので急いで準備をしてよろしいと言いだされた。

準備と言ってもこれという物はほとんど検問所で没収されて、持っているのはいつの日か日本へ帰る時が来たら着て帰ろうと包んで置いた古びた軍服が一着、下着が数枚、炊事用の飯盒、その他少し底が抜けた皮靴、以上の物が、私が移動する時の全ての財産である。内地へ帰りたい一心で、無理をして食事をしていないので、体が衰弱しきって私だけでは思うように歩

くことができないので、引揚船で（リバティイ船）の船室まで担架で運んでやると言われた。

遂に内地へ帰れる時が来たと、嬉しくて止めども無く出て来る涙をぐっと押さえながら、ベットの上で静かに待っていた。

やがて、担架を持って迎えに来た人は、この野戦病院へ作業員として配属された我々と同様、日本人捕虜の軍医の方達であった。同じ捕虜生活をしていながら、内地へ帰れる人、またいつの日か帰れる当ても無く引揚げ専用の病院船に送り込む作業をしている人もいる。日本人捕虜の人達を後に、感無量の思いでシンガポールの埠頭に停泊している病院船まで担架で運ばれ、船内のベッドの上で船が出港するのを、嬉しく震える胸を押さえて待っていた。

この船は南方方面の日本軍とそれに付属する軍属、邦人専用のアメリカから借用している引揚げ輸送船である。私は急に元気が出て何だか船内を駆け回りたい程でした。だかここで余り元気が出たことが分かれば船から降ろされて作業隊へ戻される可能性があるの

で、船が岸壁を離れ陸が見えなくなるまで、じっと我慢して待っていた。やがて病院船は日本に向かって出港する朝が来た。船のスクリーンの音が寝ているベットの上まで伝わって来る。

病院船なので、船内には日本の看護婦さんが、大勢働いていて、病人や怪我人の患者の面倒を見ていた。その看護婦さんが私のベットの側に来て、病気の内容を聞きながら、いろいろと内地のニュースを涙を流しながら話してくれた。その時の看護婦さんの姿は本当に天使のように私の目には写った。

私達を乗せた日本軍引揚げ用のリバティイ船は、汽笛と共に静かにシンガポールの岸壁を離れ、滑るように動き出した。私は食欲も進むようになり、ある程度体調も戻り、早速出港した翌日から、率先して船内の同士達の炊事当番を毎日手伝うように心掛けた。

夜になると、毎晩のように歩ける人はベットから出て船の甲板で星空を眺め、心の中で何を考えているのか？ 戦友達の目が潤んで見えた。時々夕食後になる

と船内放送が流れた。それは初めて聞く日本の歌「りんご可愛や」あの歌が流れてきた。幾年も軍歌以外歌ったことがない私達は、ただ涙を流しながら聞いているだけでした。

引揚者に乗せた病院船は、戦時中連合軍が撤き散らした魚雷を避けながら、日には何週間も掛かるが、安全の為、東シナ海を航行して、本土の浦賀港に向かった。

昭和二十一年九月上旬

浦賀港の岸壁が遠く微かに見えて来た。汽笛が鳴り響き、船は浦賀港の埠頭へ静かに接岸して錨を降ろし始めた。二度と踏めないと思っていた日本の土。しかし何年も命を的として国の為に戦って来たのに、誰一人として迎えてくれる人は見えなかった。上陸をして初めて知った敗戦の情けなき、それでも私達は生きて祖国の土を踏めるのだから、最高の幸せだが、まだいつ帰れるか分からないで、異国の空の下で捕虜となつて重労働をさせられている皆さんには、本当に済まないと思つた。

下船した引揚者全員、そのまま引揚者援護事務局に呼ばれ、皆さん長い間大変ご苦勞様でしたと、国から渡されたお金が、一円札で十枚（十円）、要するに生まれ故郷へ帰るまでの食事代であった。ただ今覚えてるのは、たしか上野駅で買った芋羊羹が四本で一円ぐらいだったと思う。

その芋羊羹を食べながら上越線に乗り、出征兵士として大勢の人と歓呼の声と涙で送られた沼田駅下車、改札口から外に出て、そうっと辺りを見て、余り人がいないのでそのまま生まれた実家に戻った。知らない人が見れば乞食と思われたらろう。ポロの軍服に底の抜けた革靴、その上肩から荷物を入れる袋をぶら下げて歩いていたのである。

昭和二十一年九月中旬

沼田駅を降りた私は四キロもある道程を歩いて、やっとの思いで生まれた実家に辿り着いた。既に夕日は沈みかかっていた。私はただ両親と兄妹の前に座つて一言「ただ今帰りました」と言つて、そのまま長い時間泣き伏していた。

両親、兄弟は戦争が終わったというのに一年以上過ぎてても帰って来ないし、全然便りも無いので、もう戦死をしたと思って時々陰膳を供えながら、万が一にも生きて帰って来ることを祈っていたのだと、両親に聞かされた。

戦争は二度と起こしてはいけない。起こさせない。大勢の尊い、若人の命を奪い取るのである。

「特幹譜」

その純粹なる魂の軌跡

東京都 平野康夫

国家が総力を結集して一つの目的に向かっている時、この国に所属する男も女もひとしくこれに協力するか、或いは献身する義務があるのは至極当然の事である。

それが戦争であり、他国をやっつけるという目標で

あるならば、男は、欣喜雀躍として武器を執る。聖戦か、侵略かなど考える余裕がある訳はない。これが自然である。そして最も手っ取り早い参加の形が「志願」である。

「わが胸の燃ゆる思いにくらぶれば 煙はうすし桜じま山」幕末の勤皇の僧月照は、こう詠んで錦江湾に入水した。地下に巨大なマグマを貯えた桜島は、時に噴煙をあげて爆発する。元来「志願」という燃ゆる思いは参加行動の典型であって、行動は勇、思考は純、ややオッチョコチョイの傾向を伴っている。

私たちはこれに呼応した。

情報は昭和十八（一九四三）年十二月十五日朝刊の新聞報道から知り得た。

—毎日新聞紙面から抜粋—

陸軍に「特別幹候制」生まる

青少年から優秀下士

入隊後一年半で伍長に